

小早川隆景と太宰府

たかかげ

小早川隆景は戦国・安土桃山時代の武将です。天文2年(1533年)、毛利元就もとむねの三男として生まれました。幼名を徳寿丸と言い、後に又四郎などと称します。小早川家へは幼いころに養子に入り、同じく吉川家きょうかわの養子になった二男の吉川元春もとはるとともに本家の領国経営を支えます。毛利・小早川・吉川の3家の協力関係は、3本の矢のエピソードとして有名です。

小早川隆景は知勇に優れた武将でした。秀吉の中国地方への侵攻の際には、毛利軍側の講和の交渉役をつとめます。また毛利家が秀吉の勢力下に入ると四国・九州の戦線において大きな戦果をあげました。秀吉の晩年には徳川家康とともに五大老の一人にもなりました。

太宰府と小早川隆景の関係は領国支配を通じて結ばれました。天正15年(1587年)、隆景は九州攻めの恩賞として筑前・筑後・肥後に所領を得ます。領国入りした隆景は、博多西方に名島城を新たに築き、領内各地で年貢高などを定める検地を実施して、領国支配の基盤固めを行います。太宰府天満宮もこの検地によって中世以来の荘園所領の多くを手放すこととなります。

太宰府人物志

資料室だより ⑦

この一連の領国支配のなかで小早川隆景は太宰府に大きな足跡を残すこととなります。それは天正19年(1591年)に行われた太宰府天満宮の本殿再建です。天満宮の本殿や回廊の建造物は天正7年(1579年)に焼失し、長引く戦乱で往事の面影を失っていました。隆景はこの状況を嘆き、現在にまで残る壮麗な本殿を再建したのです。この隆景の本殿再建は、石田三成や黒田如水・長政父子といった戦国武将による天満宮への寄進のさきがけとなりました。

この本殿再建に見られる隆景と太宰府天満宮の密接な関係はこれ以後も続きます。秀吉の朝鮮出兵の際には、隆景の出陣のために天満宮が連歌会を興行しています。また釜山に滞在する隆景への陣中見舞いもなされました。筑前を含む領国の大名となった隆景にとつて太宰府の地が持つ意味は特別なものがあつたといえるでしょう。

文禄2年(1593年)、小早川隆景は病を理由に日本に戻り、自らの所領は跡継ぎの秀秋に譲ります。その後、備後三原城で隠居生活を送りますが、慶長2年(1597年)に亡くなりました。享年65歳でした。